

# 東アジアが共に生きるためのシティズンシップ教育 —ABCモデルに基づいた教育実践からの考察—

森山新

お茶の水女子大学 基幹研究院

## Citizenship education for East Asian countries to live together harmoniously: An educational practice based on ABC model

Shin MORIYAMA

Ochanomizu University; Faculty of Core Research Humanities Division

This study discussed the outcomes of international joint classes using a videoconference system based on the ABC model, particularly the effects as a kind of international citizenship education for people in East Asian countries and live together in harmony.?

In the classes, participant students were initially engaged in the Autography step, where they reflected on how their own (national) identities and the images they had of other countries developed. Secondly, they interviewed their partners, of different nationalities, in the next Biography step. They then compared and analyzed both of their autography and biography, and presented the results in the last stage of Cross-cultural analysis. In addition, they discussed how people in East Asian countries might overcome the conflicts that exist between them and live together harmoniously.?

After class, they wrote reports and submitted them, and they were qualitatively analyzed to unwrap the effects and the limitations of the practice as international citizenship education. As a result, their identities and their image of others were passively influenced by both education and media. Moreover, they overcame their negative images of other countries through open dialogue. This indicates that these classes and the ABC model were considerably effective in overcoming the national conflicts and living together harmoniously, and useful as a kind of international citizenship education.

**keywords** : East Asia, symbiosis, international citizenship education, the ABC model

### 序論：研究の背景と目的

東アジアの国家間の関係は今日、ますます混迷の度を増している。かつて日本に多大の被害を被った韓国、中国などが次第に力を増す中、これまでは「解決済み」としていた問題に対しても沈黙が破られ、それに対し日本政府が反発する形とも見受けられる。このような状況は、第二次世界大戦後の処理が十分なもの、妥当なものであったのか、という深刻かつ根本的な問題をも喚起している。

このような対立を目の前にし、日頃、日本人学生を相手に多文化交流・多文化共生を教え、かつ韓国や中国などの留学生に対し日本語教育実践に携わる我々にできることはないのか。このような考えのもと、

2004年以降、いくつかの教育実践を展開してきた。

その一つが2007年より開始した、TV会議システムを用い、日韓(中)の学生が共に学ぶ国際合同遠隔授業である。本授業は毎学期韓国の協定校である釜山外国語大学校で日本語を学ぶ学生と共に行われてきた。最初の頃は互いの文化を理解する、異文化理解をテーマとすることが多かったが、近年は日韓、東アジアに未解決の問題として残る様々な問題こそ授業で扱うべきであると考え、取り上げてきた。

このような中、Byram(2008)を通し、ヨーロッパでは第二次世界大戦後、国家間の対立による悲劇を二度と繰り返してはならないという深い反省の中で、共に生きるための歩みを始め、欧州連合建設にこぎつけたこと、統合に際し、言語教育が重視され、そこでは

シティズンシップ教育としての外国語教育の模索がなされていたこと、外国語教育が国家、文化を越えたシティズンシップを育むには、言語、文化教育のみならず、政治教育を扱うべきであることを知る。そしてこのByramの主張は、筆者自身の教育実践と相通ずるものを感じ、理論的枠組みの一つとして参考にしつつ、自らの実践をよりよいものとしていった。

Byram et al. (2016)はByram (2008)の理論的枠組みから行われた実践を集めたものである。この中でLundgren et al.(2016)は、ABCモデルという異文化間の理解とコミュニケーションのモデルを活用し、背景を異にする他者に対し得る教師養成のための教育実践を行った。本教育実践はこれにヒントを得て行ったもので、Lundgren et al.同様、ABCモデルを用い、様々なコンフリクトを抱え、対立の絶えない東アジアの学生たちに、相互理解を深め、共に生きるためのシティズンシップ教育として行われたものである。本研究はこのような実践を振り返り、その成果を質的に分析し、東アジア共生のためのシティズンシップ教育としての有効性を考察することを目的としている。

#### 先行研究

本章では本実践が用いたABCモデルについて紹介した後、これまで筆者が実施した東アジア共生のためのシティズンシップ教育を取り上げ、その有効性についてふりかえる。

#### ABCモデル

ABCモデルとはSchmidt et al. (2006)により提唱された。本来的には文化的に異なる他者としての児童生徒にも対し得る教師養成などに活用するため提唱されたものであるが、異なる他者と対話を行い、相互理解をめざす筆者の教育実践にも応用可能と考え導入した。以下の3段階を経て、自己を知り、他者と対話し、両者を比較しながら多様性に気づき、自己及び他者への理解を深めることをめざす。

① Autobiography (A):教育、家庭、宗教的伝統など、自身の人生における重要な出来事を振り返り、自身のビリーフや態度に対する気づきを得、それを人間普遍的な観点から捉え、他者の差異に対する否定的な考えを軽減しようとするプロセスである。

② Biography (B):同様なことについて、文化の異なる他者はどうなのかについてインタビューを行うプロセスである。

③ Cross-cultural analysis (C):両者の異同を比較、分析しながら、文化的差異について考察することで、他者に対する洞察力や自身の自文化中心性に対する気づきを得るプロセスである。

#### 東アジア共生のためのシティズンシップ教育

森山 (2016) では、森山が行ってきた多言語・多文化サイバーコンソーシアム、日韓大学生国際交流セミナー、国際学生フォーラムの3つの教育実践について、その意義と成果についてまとめている。特に多言語・多文化サイバーコンソーシアムは、本稿で扱うTV会議システムを用いた国際合同授業を指しており、小林 (2013、2014) はその成果について述べている。しかし小林の研究の時点では、未だ本授業が政治問題を扱っておらず、かつABCモデルを導入していない時期でのものであった。

日韓大学生国際交流セミナーを扱った研究には、西岡 (2010)、松野 (2014)、森山 (2019、2020) などがある。このうち、政治問題などを扱ったセミナーを取り上げ、シティズンシップ教育の成果を明らかにした研究は森山 (2019、2020) である。

森山 (2019) では、セミナーの成果について、特に戦後70年に際し、日韓の間の歴史・政治問題を取り上げた第10回セミナーに注目し、そこに参加した日本側の学生たちを対象にそのセミナーの間国家的シティズンシップ教育としての効果について調べた。結果、日韓の学生たちの相互理解、共に生きようとする姿勢が大きく向上しており、セミナーが間文化的シティズンシップ教育として効果を上げていることが明らかになった。しかしながら、日本側の参加者は、日頃から日韓関係をはじめとした国際関係を学び、政治にも関心を持つ学生であり、かつヨーロッパの複言語・複文化主義やByramの考えを事前学習等で学んだ上でセミナーに参加している。また指導に当たる教員も、グローバル文化学環に属し、かつセミナー開催の目的も間文化的シティズンシップ教育としての側面に重点を置いているため、日本側の学生たちのセミナーへの参加動機も、韓国の言語や文化を学ぶことよりは、日韓両国の間に存在する政治的問題について韓国の学生と討論、考察することであった可能性がある。また上述した間文化的視点やシティズンシップ教育としての効果もまた、そうした彼ら自身の元々の問題関心にも由来している可能性が否定できない。そのため森山 (2020) では、同じ第10回セミナーに参加した韓国側学生を対象に、間文化的シティズンシッ

ブ教育の効果について明らかにした。韓国側参加者はほとんどが日本語科に所属する学生であり、日頃、日本の言語と文化を学び関心を持っている学生である。また指導に当たる教員も日本語科教員であるため、日本語使用や異文化理解の場としてセミナーを位置づけ、学生の指導に当たっている。そのため本セミナーに参加する動機も日本側の学生とは異なり、日本語を用いたり、日本について知ろうという動機の学生が多い。また事前学習でも複言語・複文化主義や Byram の考えを学んでいるわけではなく、開講式の講演で初めて耳にする学生である。このような韓国側参加者に対しても、セミナーが単に日本語教育、即ち日本の言語・文化を学ぶ場であるだけでなく、間文化的シティズンシップ教育の場として有効であったかについて調べた。結果、日頃日本の言語・文化を学ぶ韓国側の学生にとっても、言語・文化に対する学びの動機を刺激するだけでなく、政治的・歴史的対立を超えて相互理解を深め、共に生きようとする間文化的シティズンシップ教育の場として有効に機能していた。しかしこれらも ABC モデルを用いた実践ではない。

国際学生フォーラムを取り上げ、その間文化的シティズンシップ教育の成果について明らかにしたものは松田 (2013) がある。松田では、東日本大震災からちょうど1年が経過した2012年3月に開催された第1回フォーラムの成果について、海外7か国(アメリカ、ドイツ、ポーランド、チェコ、タイ、中国、韓国)から参加した学生を対象に、「震災復興をグローバルとローカルな視点から捉え、グローバルな若手人材の育成をめざす」というフォーラムの目的が達成されているかについて調べた。結果、海外の学生たちは自国の視点のみならず、他国の視点から震災を考えるようになるとともに、災害時には国を超えてつながり、支え合うことの重要性を学んでいた。またフォーラムでは歴史問題を積極的に扱い、そのことは歴史問題故に今日も続く国家間の摩擦解消に大学生が取り組む上で重要な一歩となったとした。グローバル人材育成の成果については、情緒面では偏見の除去や異文化理解が促され、認知面では他文化を知ることが自文化を省みる契機になり、行動面では災害に対し歴史を超え、国を越えて連携する態度が引き出されたと、その成果を情緒・認知・行動面から明らかにしている。このように東アジアがともに生きるための間文化的シティズンシップ教育としてのフォーラムの成果が報告されているが、これも ABC モデルを用いた実践ではない。

以上、東アジアがともに生きるためのシティズンシップ教育実践を取り上げたが、ABC モデルを用いたものはない。したがって ABC モデルを用いることで東アジア共生のための実践に効果があるのかについては不明である。以上から本稿ではこのモデルを用いた教育実践(授業)を取り上げ、そのシティズンシップ教育としての成果を明らかにしていく。

## 研究課題 (RQ)

研究課題は以下のように、RQ1 では主に ABC のプロセスをたどりながらその成果を考察し、RQ2 では ABC モデルを用いた本授業が東アジア共生のためのシティズンシップ教育として有効かについて考察する。

RQ1 ABC のプロセスを通し、学生たちはどのような気づきや学びが得られたか？

1-1 自身を振り返る A のプロセスを通し、自身のアイデンティティ・他者イメージ形成をどのように分析したか？

1-2 他者との対話およびクラスでの討論を行う B、C のプロセスを通し、どのような気づきや学びが得られたか？

RQ2 東アジア共生のためのシティズンシップ教育として、学生は授業をどう評価したか？

## 研究方法

研究対象は2018年度前期(4月12日～7月26日)に実施された筆者が担当する「言語と文化」の授業で、受講者は12名(日本人6名、韓国人4名、中国人2名)である。この授業は毎学期、釜山外大とTV会議システムを用い国際合同授業として実施している。釜山外大の受講者は7名である。釜山側1名とお茶の水女子大学側1～2名が1つのグループを構成した。4月19日に初顔合わせをし、筆者が両大学の学生に授業の趣旨やABCモデルを説明した。その際、映画「そして父になる」を引用しつつ、「現在日韓は歴史問題、領土問題などで対立しているが、もし皆さんが生まれた直後、親が入れ替わり、相手国の国民として育つとしたら、皆さんのアイデンティティや相手国のイメージはどうなっていたらだろうか」といった問題提起をし、「この授業を通し、各自のアイデンティティや他者イメージがどのように形成された

かを今一度考察する時間を持ちたい」という問題提起を行った。その後、まず各自がA (Autobiography) を執筆した。ここでは Schmidt et al.(2006) に従い、記述は母語でもよいと告げた。その上で、同じグループの学生に対し、B (Biography) のインタビューを実施した。海外の相手にはLINEなどのビデオ通話・音声通話などを使用し、同国内の相手に対しては直接会ってインタビューを行った。それらのデータをもとにグループごとに発表を準備し、5月17日から4回、合同授業を実施した。授業での使用言語は主に日本語である。4回の合同授業後は、釜山外大側は夏休みに入るため、お茶の水女子大学側のみでA、B、Cのプロセスごとに毎週振り返りの授業を行い、各学生がそれぞれのプロセスにおける学びや気づきを発表し、意見交換した。7月には3回にわたり最終発表会(1名ずつ、1回当たり4名ずつ)を実施した。全ての授業が終わった後、学生たちにはその学期の授業で学んだことについてレポートを書き提出してもらった。本研究のデータはこのレポートを用いた。レポートは、だれとどのように活動を実施したかについて述べた「基本情報」、ABCそれぞれの学びについて記述する「各段階での学び」、そして授業を総合的に評価する「総合的考察」からなる。執筆にあたっては、評価の客観性を高めるため、授業の成果をクリティカルに見つめ評価するように求め、そうした点が成績評価の対象になることを伝えた。

分析は、RQ1については「各段階の学び」(RQ1-1、1-2はA、1-3はB、Cの段階の学び)の記述、RQ2については「総合的考察」の記述を中心に、該当する部分を抽出し、質的に分析した。なお授業データを研究に用いるため、所属機関(お茶の水女子大学)の倫理審査委員会の審査を受けた。

### 研究結果

以下、RQごとに結果を示す。「」は抽出されたRQ考察に重要な構成概念を示し、レポートからの引用は段落を換え、(1)～(73)の番号をつけて記した。j1、k1などは対象者を示す。j、k、c、hは参加学生の国家・地域のアイデンティティを表し、各々日本、韓国、中国、香港を示す(hは中国籍であったが、自らを「中国・香港人」と称していたためそれを尊重した)。また以後の文中で「～人」というのもそれに従った。

自身の振り返りによる学び (RQ1)

自身のアイデンティティ形成 (RQ1-1)

「自身のアイデンティティの形成」については、12名中日本人6名、留学生4名が言及しているが、幼少期に海外で生活した帰国生(j1)などを除き、日韓の学生の多くは(1)～(6)のように「無自覚」であったと表明している。また残りの韓国人の残り2名(k1、k2)は(7)、(8)のように、「自身のアイデンティティ」ではなく、「他者イメージ」をアイデンティティとして述べていた。

(1) Autobiography を考えるにあたって、私の「日本人というアイデンティティというのは何なのか」ということにも初めて目を向けた。(j3)

(2) Autobiography では自分のアイデンティティについて深く考える機会となった。自分の人生を振り返る中で、日本人としてのアイデンティティを意識した場面は少ないことが分かった。(j4)

(3) 国や韓国などに対しての過去の日本の過ちに対して、私は自分たちが実際に何かしたわけではないのに、一体いつまで「歴史責任」という名前のまま罪を償い続けるのだろうかという疑問を正直持ってしまうことに気付いた。日本人という意識よりも個人としての意識が強いかもしれない。(これは自分が加害者側にいて被害者の思いに直接触れる機会がなかったから、つい合理的に考えてしまうだけなのかもしれないが。)そもそも日本人である自覚をしっかりと持っていない状況で日本の過去の行為について責任や誇りを感じにくい自分がある気がした。(j5)

(4) 今までの自分を振り返ってみて、「自分が日本人だ」といったアイデンティティがいつ頃形成されたかが明確ではないなと感じた。(j6)

(5) 韓国人のアイデンティティに関しては、私は韓国で生まれ、韓国人の間で育て韓国人のアイデンティティを持っていた。普段はあまりマイナリティーにならなかったことがないし、韓国人のアイデンティティを自覚する機会がなかったが(後略)(k3)

(6) Autobiography の過程があったからこそ、私も知らないうちに形成された考え方とステレオタイプについて振り返ってみるきっかけになりました。私は両親

が韓国人で、生まれた時から今までずっと韓国で育ちましたので、完全に韓国人と韓国文化に囲まれて生活してきました。(k4)

(7) Autobiography を通して、日本についてのどのように肯定的にアイデンティティを形成したか、またどのように否定的にアイデンティティを形成したかを初めて、その理由を考えるようになった。その中で気づいたのは学生の時期学んだ教育、その中でも日本語と歴史教育が日本に關した私のアイデンティティに大きな影響を与えたということだった。(k1)

(8) ここでは自らのアイデンティティの形成過程を振り返ることができた。日本人と韓国人で構成されたグループだったため、主に日本に關する幼い頃の記憶や経験に注目して Autobiography を作成した。このようなものを通して自分自身の性格などがどう作られたのか内面的に省察することができた。(k2)

中国人 c は、自身のアイデンティティが無自覚で形成されたとは語っていないが、自身の国家アイデンティティを感じたのは、(9)(10) のように、歴史の授業で戦争中の日本軍の行ないについて学んだ時、及びスポーツ観戦の時であると述べており、それ以外の時は日韓の学生同様にそれほど自己のアイデンティティを自覚していないようであった。

(9) 戦争中の日本軍がしたことに対して、はじめて「愛国心」というものが生まれた。(c)

(10) 自己アイデンティティに関しては、たとえばスポーツ観戦のとき、思わず自分の国を応援するし、日韓に負けたら悔しいなどの感情も自然に生まれる。(c)

これらと対照的だったのが香港の学生 (h) であった。(11) のように家庭環境や学校という教育環境の中で早くアイデンティティを考え始め、それは言葉を通じ強化されている。これは他の学生たちとは明らかに異なっている。

(11) 自己アイデンティティの形成は最初家族と生活する環境から影響を受けた。そして教育を受け始め、自分でアイデンティティについて考えるようになったら、言葉はアイデンティティの形成に大きな影響を与えていることに気づいた。(h)

日韓中の学生の「無自覚」の原因として、社会の「同質性」(6名:j2、j3、j4、j6、k3、k4)、「自身がマジョリティであること」(1名:j4)、「国家意識より個人意識が強いこと」(2名:j2、j5)などが挙げられていた。しかしこのような無自覚な学生においても(12)～(16)のように、「異なる他者の存在」(2名:j1、j2)、「マイノリティの立場」(2名:j1、j4)、「スポーツ観戦」(3名:j4、k4、c)、「自文化への愛着」(2名:j1、j4)、「国家的対立」(2名:j1、c)などを契機に、アイデンティティや愛国心が喚起されることがあるとも述べていた。さらに h は「アイデンティティ形成に影響を与える諸要因」には、(11)で示したように「言語教育の影響」があるとしている。

(12) 自身は他者との比較から自分が日本人であることを明確に意識するようになった。(j1)

(13) 韓国と日本が過去の歴史を巡って対立している時や、日本人・アジア圏出身だからということで欧米人から距離を置かれた際には日本人であることが恥ずかしくなる。(j1)

(14) 自己アイデンティティに関しては、他者の存在や視線があつて初めて、自己を振り返るきっかけが生まれ自己アイデンティティが形成されることに気がついた。日本は同文化主義的なところがあるので、他と「異なる」ということを嫌うし、他と「同じ」であることに安心する。そういった日本の文化的環境では自己アイデンティティを見出すことは難しいのかなとも感じた。(j2)

(15) Autobiography 当初は、スポーツ観戦で日本人選手を応援したいと思ったことや和食に愛着を感じる事が挙げられた。(j4)

(16) オリンピック又はワールドカップなど国際的なイベントでは当たり前韓国を応援しました。これは韓国人という所属感を感じさせたし、韓国が勝った場合、韓国人として誇らしく感じたこともあります。私は自分なりに Autobiography を作成しながらこの＜所属感＞というのも韓国人としてのアイデンティティが形成されるのに結構大きな影響を与えたと思いました。しかし、これは当たり前なことで決して悪いことではないと思います。(k4)

他者イメージ形成 (RQ1-2)

「他者イメージの形成」については、11名 (j1 以外) が回答した。他者イメージの形成要因としては、「メディア」(9名: j1, j3, k2 以外、(17)～(25))、「学校教育」(5名: hを除く留学生、(26)～(28))、「周囲の人」(4名: j2, k2, k3, c、(29)～(31))、「家族」(3名: k2, h, c、(32)～(34))、「旅行・留学・国際交流」(2名: j5, k1、(35)(36))などとなっている。「メディア」の影響はどの国の学生も言及があったが、「学校教育」「周囲の人」「家族」は留学生の言及が多く、日本人の言及は少なかった。日本人2名 (j2, j5) は上述のように、「無関心」「知識不足」「個人意識」により他者に対し無自覚であったとしている。

(17) 日本のメディアが誇張した重々しいアナウンスで韓国を敵視するような報道をするのを見て、韓国人の友人個人に対するイメージは変わらずとも、やはり韓国の負のイメージが自分の中で後付けされていると思ったからだ。それに感化されて韓国人を敵視するようになることはないが、少なくともメディアで見た韓国に関する報道が、自分の中の韓国のイメージを形成しているものであるのは確かである。(j2)

(18) 私の他者イメージの形成は、メディアによる影響が大きいことが分かった。テレビで韓国人が反日デモを行っている様子を目にして、韓国人は日本人を嫌っているという一方的なイメージを抱いた。また、好きなスポーツ選手のライバルが韓国人選手であるという理由だけで、ライバル選手本人だけでなく、韓国という国自体も毛嫌いしていた。一方で、幼い頃から韓国の時代劇には親しみがあつた。政治的な問題に限らず、文化やスポーツもメディアを通して知ることが非常に多い。良い意味でも悪い意味でも、メディアの影響は大きい。また、テレビニュースを通して、勝手に韓国人に対する否定的・対抗的な感情を抱いてしまった経験から、メディアは、知識・事実を伝えるだけではなく、好き・嫌い及び良い・悪いという単純な考えをもたらすことに改めて気づいた。(j4)

(19) メディアからのイメージとしては、真っ先に「歴史問題」(慰安婦、独島・竹島問題など)が浮かんでいた。(j5)

(20) 私は韓流アイドルや有名な韓国人の SNS での投稿が非常に好きなので、韓国といえば大好きなアイド

ルの国、SNS で見ると綺麗なおしゃれなカフェがたくさんある国だという風に認識してきた。また、慰安婦問題や竹島問題で日本のメディアが韓国を否定的に報道しているのを見て、韓国は反日国家で、それゆえ韓国人も日本人のことが嫌いな人が多いのだとずっと思ってきた。こうして韓国に対して持っているイメージについて考えてみると、そのイメージの形成にはメディアが色濃く影響していることが感じられた。(j6)

(21) 日本語授業を通して、自分で、家に帰って他の日本のドラマを探してみるようになった。このような影響は私が日本語科を選択するきっかけの一つになった。それだけではなく“のだめカンタービレ”のように日本の有名なドラマや歌も先生から紹介してもらったり、授業中に友達と一緒に好み焼きを作ったり食べてみたり、浴衣を着て写真を撮ったりする経験もした。(k1)

(22) 異文化についてのイメージ形成に関しては、日本や中国については教育やメディアの影響であまり良い認識は持っていなかった。家庭で両親とニュースを見る時、日本と中国についてネガティブな話を聞いたり、学校で日本との歴史問題について学ぶ時、日本と中国についてネガティブなことを学んだりしたからである。(k3)

(23) その当時、竹島問題、教科書問題などが毎日韓国のニュースで取り上げられていましたので、日本を良い国だと感じれる要素は私の周りに何もなかったです。最後はメディアと SNS の影響です。日本に何の興味も持っていなかった私が日本の文化に興味を持ち始めたのもメディアと SNS の影響でした。日本のドラマを見て韓国とは違う文化、例えば部活などを憧れたり日本人の秩序意識見てこれは習うべきだと感じました。しかし、韓国と日本の歴史問題など否定的なニュースが毎年、日本を肯定的に考えるのは難しかったですし、正直今も歴史的面では少し否定的な立場を持っています。(k4)

(24) マスメディアとソーシャルメディアは近年の若者の自己認識と他者へのイメージを左右する傾向がある。(h)

(25) 中国のマスコミは結構分かれている。「日本(韓

国)は非常に良い国」を宣伝しているマスコミもいれは、「日本人(韓国人)は悪い人だ」というイメージを人々にばら撒いてるマスコミもある。(c)

(26) 日本語授業を通して、自分で、家に帰って他の日本のドラマを探してみるようになった。(中略)しかし日本にいい感情だけもらったことだけはなかった。日本についてもっと深く考えさせてくれた教育がもう一つあった。それは歴史授業だった。韓国では小学生の時から歴史の授業を受け、歴史に関して勉強している。この歴史授業の内容は日帝強占期についての事実もあるため、日本に関してもっと深く考えるようになるきっかけになった。日帝強占期に対する歴史の授業では、日本が韓国を侵略したことから、韓国に住んでいる韓国人たちに学校から韓国語ではなく日本語を使うように強要したことを教えてくれた。そして、日本に対して対抗している韓国人たちを逮捕して拷問をしたことや生体実験あるいは殺人まで、韓国人の自由を抑圧した内容を学ぶようになった。また、韓国の文化財を、日本に持って行ったり、韓国の伝統的な建物を毀損したりする等の多様な内容も学ぶようになった。このように歴史の授業を通して学んだ歴史的事実は衝撃的だった。今はそうではないが、日本の文化と日本語とは別に、ちょっと不定的な感情を持ったことも事実だ。またドイツとは違って、このような歴史的な事実を謝罪することではなく自然に渡った事実も、ちょっと否定的に感じるようになった。また実際に日帝強占期時代を経験したお婆さん、お爺さんがいた家庭もあり、歴史の授業を習った時はちょっと衝撃的だった。(k1)

(27) 学校で日本との歴史問題について学ぶ時、日本と中国についてネガティブなことを学んだりしたからである。(k3)

(28) 次は学校での歴史教育です。私の家族の中で反日感情を持っている人はいなかったため、小学校4~5年生になるまでは日本に対して特に悪い感情はなかったです。しかし、小学校5年生の時から始まる歴史教育によって日本という国に対して否定的に考えるようになりました。その時点で私は私自身が韓国人だとはっきり認識していましたので、日本が植民地時代に犯したことを学んで日本は私たち(韓国)に悪い国だなと思ったりしました。(k4)

(29) 日本語の勉強を始めてからは、社会的に冷ややかな目で見られ、友達や教師から皮肉めいたことを言われたり、「君は母国が嫌いなのか」という誤解をされたりもした。その影響で極端なものや二分法的なものを好まないようになったことに気付いた。論争や意見をぶつけ合う状況にも虫唾が走るようになり、積極的に意見を発せずにいると思う。意見を出さずに自分の身を守ることに必死で、他の人より日韓関係について沢山の考察ができたかもしれない状況にいなながらも、考えを深めずにまだまだ平面的な思考をしているのだと思えた。(k2)

(30) 大学のサークル活動、勉強、外国人の友達との交流のために認識がたくさん変わった。(k3)

(31) 学校には歴史を教えていた日本嫌いの先生がいた。歴史の教科書は平和という概念を重視し、反日ではないが、先生が日本嫌いなので、「日本人はひどいことをした」というイメージが非常にあった。(c)

(32) 幼い頃、父が日本に関した仕事をしていたため、家庭は日本に友好的だった。だが、慰安婦や植民地時代の話と共に「日本は悪い国」という家庭教育なども受けたため、自分に優しくしてくれた日本人と教育の中で悪く描写された日本人とのギャップに少し混乱を感じていた。(k2)

(33) 自己アイデンティティの形成は最初家族と生活する環境から影響を受けた。(h)

(34) まずは家族であるが、日韓に対して、両親は特に嫌な感情などを抱いていない。私が日本語を勉強し始めたときも応援してくれた。そして、両親がまだ若いとき、日中の関係はすごくよかったので、二人は日本に対しては少し好感を抱いている。なので、家族の影響を受け、小さいころから日韓に対して私も特に嫌ではない。(c)

(35) 高校2年次にニュージーランドに留学していた際、留学生向けの授業の中で母国について自由にプレゼンテーションをすることになった。その時、3人中2人の韓国人が伊藤博文の批判を含むプレゼンテーションをしようとしていた。その場に日本人は私しかいなかったが、そのようなプレゼンをしてもよいのかと先生に確認をとる彼女たちの姿を見て、自分がその

クラスの中で悪者になった気分だった。また、その経験があるまで日韓併合など日本と韓国の歴史についてきちんと理解できていなかったため、自分の無知さと歴史問題に対する敏感さを痛感した。(j5)

(36) 教育だけではなく、日本旅行も私にいい影響を伝えた。(中略) この旅行を通して日本で生活してみたいという感情も持つようになった。(k1)

#### 自他の比較による学び (RQ1-3)

Bを通じ他者に対する知見や理解を得、Cを通じ自他を比較する中で、自身の姿勢や態度への反省や自身や社会に対するあり方について述べたり、対話の重要性を実感したりしていた。「他者に対する知見や理解」や「自他の差異とその分析」に関しては全員が述べている。また、そのような対話を通じ、「自身の姿勢や態度への反省」や「自身の姿勢や態度のあり方」について9名(j1, j2, j3, j4, j6, k2, k3, k4, c, (37)～(46))が言及し、「対話の重要性」は3名(j2, k2, c, (46)～(48))が述べている。

(37) 自分を含め日本人にとっては、時に本音で話すことはハードルが高いかもしれない。Biographyを行う際には我々が変わる必要もあるのだと知った。(j1)

(38) 自分たちのグループの発表や、他のグループの発表を聞き、国としての立場に立ってしまうゆえに分断が見られる。発表の形式(特に Autobiography や Cross-cultural analysis) のこともあるが、自分の国の視点から物事を話すシーンがどうしても多く、国ごとの発表になってしまっている印象はあった。(中略) 学生としては、国の代表としてでは無く、一個人としての発表を意識しても良いかもしれないと感じた。(j1)

(39) 自分のインタビュー力が足りなかったことと、デリケートな問いにどこまで踏み込んで良いのかわからなかったこともあり、生の声だからこそ躊躇してしまって聞けなかった部分も正直あった。(中略) Biographyは「傾聴」を具体化したようなフェーズだった。主題がデリケートなだけあって、一度自分の固定観念や思い込みを外したまっさらな状態で話を聞くことが大切だったと振り返って改めて思う。(j2)

(40) 対話することについては、初めはお互いの中身をさらけ出すということは得意だ、というように感じていたが、肝心なところは避けていたことに気づいた。さらけ出すといっても、こういった歴史問題に関しては、自分がどういった理解を持っているのかについてしっかり理解していなければ自己開示というのは無理である。私は、一つの問題に対してしっかりとした意見を持っていることができていなかったため、結果、自己開示をすることは私にとって困難なことのひとつであったことに気づいた。(j3)

(41) メディアの改善を期待するのではなく、我々メディア利用者のメディアに対するアプローチを変えることが重要であるのではないかと。少ない情報を鵜呑みにして決めつけるのではなく、様々な情報を得て、比較・検討を通して、自分の意見を持つことが必要である。また、人間が情報に流されやすく、限られた情報を鵜呑みにしやすいということを自覚する必要もある。情報に流されそうになったときに、ふと立ちどまり、本当にそうなのか、他のメディアではどのように伝えられているのか、と批判的な視点を持てるかが重要になってくるからだ。メディアに対する批判を前述したが、hさんの発表・レジュメにもあるように、メディアは世界を知る大切なルートであるため、私たちの生活からメディアを排除することは不可能である。私たちは、メディアとの上手なつきあい方をしていかなければならない。(j4)

(42) 百聞は一見にしかずというが、メディアの情報や人から聞いて得た情報は物事全ての一側面にしか過ぎず、しかも誇張されていたり事実が少し捻じ曲げられていたりもする。自分の目で実際に見てみることで、自ら積極的に学んでみることで、他国の文化に触れてみることで、自身の中の偏見を解き放つ第一歩であると感じた。また、歴史問題について話し合う中で、自分も相手もその問題を正確に理解していないし、理解しようとしていないと感じた。Autobiographyでも感じたが、自分で知ろうとせずに偏った情報を鵜呑みにして知ったような気になって、なんとなくの感情で物事について判断することは、時に非常に恐ろしいことにつながると思った。(j6)

(43) 異文化について完璧に知ることは出来ないだろうとしても、お互いに相手の文化や考え方への理解ができればそれでいいのではないかと考えた。(k2)

(44) 歴史の勉強を一生懸命しているので、過去の歴史には、正確な事実を認知し、記憶することは韓国人にしる日本人にしる、重要だと思われた。歴史を正しく認識していると、再び同じ過ちを繰り返さずに、未来志向的な交流をすることができるからである。ちなみに、国家と個人を区別して考えなければならないと気づいた。国に対するイメージはあまりよくなくても、個人にそのような否定的な感情を持つことは不適切だと思い、過去の私を振り返る機会になった。(中略) 国対国より、人対人で見える姿勢が正しい。国籍で人を勝手に判断してはならないし、国籍と構わず、人のアイデンティティはそれぞれ色々であるためである。すなわち、人対人で対話をするともっと偏見を持たずに対話ができると考えられる。(k3)

(45) 私はグローバル時代では韓国人、日本人、中国人、香港人に分けて考える前に一人の人間として見つめることが何よりも授業だと思います。日本人だから、韓国人だから皆そういう性格を持っていると一人で決めつけるのはよくない行動です。つまり、個人の性格や信念などを国籍に結び付けて全てを考えるのは今の私たちが直すところではないかと感じました。(k4)

(46) グループ発表において、中日韓の教育における異なる点を分析していくうちに、各国の教育はすごく異なっていることに気づき、皆さんにも納得できるような分析や提案を考え、いろいろと悩んだ最後発表時のようにまとめたが、それでも主観性が入りすぎたかどうか心配した。それは、自国の話になると、どうしても肩を入れたいという考えが存在しているからである。しかし、意見が異なった場合、意見交換と考え、率直に語り、同時に相手の率直なことばを聞くのもすごく勉強になれると思う。ただひたすらに自分の考えを他人にぶつかる、あるいは自分で考えないで、他人の意見だけを聞くのどちらでもなく、自分の考え方を相手に伝えると同時に、相手の意見を尊重するのが大事だと感じた。これは、東アジアの共生を探求するときにおいても重要ではないかなと思う。十分の話し合いの上で、こうした結果を得て、やはりコミュニケーションとは欠けないことと感じ、チームメイトに感謝している。(c)

(47) 対話の可能性を肌で実感できた時間であった。また、デリケートな歴史問題や政治問題に触れながら意見を交わすことは「授業」という形でないとなかなか

かできない体験だった。韓国人の友達はいても、あえてこのような話題にふれることは今までなかったからだ。しかし、腹を割って話せたこと、また腹を割った話が聞けたことで、今まで以上の互いへの理解や信頼を築き上げることができたと感じている。(j2)

(48) 三つ目は「和んだ雰囲気」で、これもまた、前の「自由性の高さ」から起因したものとも言える。異なる文化の価値観が衝突しがちな場面でのインタビューは堅苦しい雰囲気になりうる。だが、堅苦しくない、ゆったりしている和んだ雰囲気でのインタビューは、お互いを国と国でなく、人と人として認識させ、「biography」段階の「対話の場」としての性質・機能をより高めたと思う。(k2)

他者イメージの形成には教育やメディアが大きな影響を与えると述べたが、これに対しては、(49)～(52)のように、教育やメディアが変わるべき、もしくは自身の批判的態度を養うべきであると自身の提案を述べている学生もいた。

(49) 他国に対するイメージを形成するための大きな要因として歴史教育が挙げられるが、今の日本の教科書には自国にとって都合の悪いような内容を取り入れないといった問題が見られる。自国の人が昔起こした過ちを知らないままでいるのは罪深いことであると感じる。公正な歴史教育を行うために、韓国と日本で朝鮮併合時代を始め二国間の歴史内容をすり合わせ、両国合同の教科書を作ることができればいいと感じた。(j6)

(50) メディアの改善を期待するのではなく、我々メディア利用者のメディアに対するアプローチを変えることが重要であるのではないか。少ない情報を鵜呑みにして決めつけるのではなく、様々な情報を得て、比較・検討を通して、自分の意見を持つことが必要である。また、人間が情報に流されやすく、限られた情報を鵜呑みにしやすいということを自覚する必要もある。(中略) メディアは世界を知る大切なルートであるため、私たちの生活からメディアを排除することは不可能である。私たちは、メディアとの上手なつきあい方をしていかなければならない。(j4)

(51) 日韓の歴史についての内容を十分に補完し、特に歪曲された情報は改正しなければならないと思う。

このため、日韓、できれば東アジア共同歴史教科書を製作したいと思う。東アジアの諸国が集まり、歴史教科書執筆会を結成し、十分な会議と、お互いの視点からの理解を通じて、できる限り意見の相違を減り、客観的な内容の歴史教科書を作ってほしいと思う。歴史の勉強の方法も少し改善しなければならないと思う。知識だけをうのみに学ぶことでは、正しい歴史の知識や認識を習得することができない。学生に日韓歴史の勉強の重要性をまず教え、学生が自ら必要によって勉強するようになれると教育をしなければならない。私の場合には、学校で学んだ歴史知識はあまり頭に残っていないが、大学の時代、サークル活動を通して学んだ歴史知識は、今まで覚えている。高校でも歴史を学び、日韓交流について研究するサークル活動を活性化させる必要があると考える。日韓交流について議論し、実際に日本人の友達と交流する活動をしてみたら、お互いに良い関係を維持するために、何をしたらいいかについて話し合う機会になると思う。(中略) 日本も韓国も自国を被害者として描写する傾向がある。韓国も加害者としての歴史を持っている。たとえば、ベトナムに対してベトナム戦争の時、韓国人が民間人を虐殺し、女性に性暴力することがあった。しかし、これも韓国の歴史教科書で詳しく記載されていない。歴史とは、完全に客観的な事実ではなく、それぞれの国の立場で改めて記録されていそうである。しかし、歴史は必ずしも加害者、被害者の声を全部含まなければならない。(中略) 歴史問題について諸国の争いが多いことを念頭に置き、できる限り事実に基づく教科書を制作必要があると思う。メディアの変化に対して、メディアは、他の国を非難するニュースや放送をしてはならないはずである。代わりに、できる限り客観性を維持するために努力しなければならない。批判するのは構わないが、偏ったニュースは放送に出してはならない。しかし、偏ったニュースが良くないと思っただけで、メディアが変わらはないので、客観的なメディアの重要性を認識している人からそのようなメディアを制作する必要があると思う。たとえば、日韓交流や異文化コミュニケーションをテーマにした映画やドキュメンタリーを制作することや、様々な国の人々が集まって交流するバラエティー番組を制作することなどがある。メディアに偏見を破る放送がたくさん登場すると、メディアが徐々に変わることができると思う。(k3)

(52) 歴史を教えるときは客観的な態度をとるべく、

子供たちに自分の主観意識を教えないほうが良いと思う。教科書も、可能であれば共同で作る、あるいは同じ標準に沿って作ったほうが良いかもしれない。マスメディアも、客観的な態度で報道し、真実を伝えるべきだと思う。親日、親韓になる必要はないが、わざと間違っただけで人々を怒らせるようなニュースや記事などはよくない。そして、私たち自身も、マスコミの言うことを鵜呑みするのではなく、冷静に考えてから発言したほうが良い。(c)

東アジア共生のためのシティズンシップ教育としての授業評価 (RQ2)

東アジア共生のためのシティズンシップ教育としての本授業の意義としては、まず、自身のアイデンティティや他者イメージの形成に関する「自身に対する気づき」について7名 (j1、j2、j3、j5、k1、k2、h) の言及があった。同時に (46)～(48) で見たように「異なる他者との間と対話の実現」でき (hを除く11名)、「異なる他者に対する理解・親交」が深められた (5名:j3、j5、j6、k1、k2) としている。歴史・政治問題などの「タブーを扱えた」という意義や達成感を述べる者も8名 (j1、j4、h、c以外) と多かった ((47)、及び後掲の (61)～(63) を参照)。

またこのような対話の実現できたことに関し、(53) (54) のようにABCモデルを明示的に評価した者もいた。

(53) ABCのフェーズを一つ一つ丁寧に踏みながら、さらにふりかえりを重ねることで、毎度新しい発見や反省、改善点が浮かび上がることを実感できた。それぞれのふりかえりがさらに自己開示の場になり、オープンになれたからこそ、他の留学生との授業では生まれなかった交流にも発展した。

(54) 今回の授業に参加して初めてABCモデルについて知ることになったが、長所が多く、多文化交流に使えるモデルだと感じた。自分なりに収めるところなる。一つ目は「段階的適合性」である。自分の内面に注目 (Autobiography) した後、1-2人のグループメンバーとの交流、最後はクラス全員との交流になるこのABCモデルは、個人→他人 (少数) →他人 (多数) の様相を示す。この体系的なモデルの中で、学生はより自己開示しやすくなり、自分と社会、他人について段階的に考えを深められる。二つ目は「自由性の高さ」である。特に規則や決まりがないため、自分に

向いている方法を自ら探し、多様な側面で自分を顧みることが出来たと思う。自由性から起因する「人の多様性をカバーできる場所」は、また、多文化を前提とするABCモデルにとっては大きいメリットだと思われる。三つ目は「和んだ雰囲気」で、これもまた、前の「自由性の高さ」から起因したものとも言える。異なる文化の価値観が衝突しがちな場面でのインタビューは堅苦しい雰囲気になりうる。だが、堅苦しくない、ゆったりしている和んだ雰囲気でのインタビューは、お互いを国と国でなく、人と人として認識させ、「Biography」段階の「対話の場」としての性質・機能をより高めたと思う。四つ目は「時間配分の効率性」である。言い換えると、グループワークのことである。約2か月という短い時間の中に様々な触れ方やトピックを扱うのに一番適した方法だったと思われる。それに、「Cross-cultural Analysis」の準備作業中、グループメンバー同士で意見交換が出来るため、一人での作業より早く結論に至ることが出来るという点で、時間の効率が良い。(k2)

東アジア共生のためのシティズンシップ教育をめざした本授業の成果についての具体的な言及としては、「東アジア的・多角的な視点・知見が得られた」(6名:j1、j3、j6、k1、k2、k3、c、(55)～(60))、「コンフリクトを克服できた」(3名:j4、j6、k2、(61)～(63))、「相手の立場に立ってものごとを考えるクリティカルな姿勢を学べた」(3名:j6、k2、c、(64)(65))などが報告された。さらにこの授業が「東アジアの共生を考え、世界市民となるための授業」であるとして、シティズンシップ教育としての成功を述べるものが5名(j4、j6、k2、k3、c、(59)(66))、この授業を「対立・論争を恐れていた自身にとって新たな人生の道を開く」(k2、(63))「今まで受けたことのない授業」(k1、(67))「広く伝えたい」(j3、(68))と評価する者もいた。

(55) お互いを理解するために様々な側面・アクターの立場に立って物事を考えるべきである。分析や発表を通して、政治や歴史の面では理解に時間がかかるかもしれないが、文化・経済面ではすぐにでも理解し合える余地があると感じた。しかも、「政治」とは様々なアクターの視点に立って物事を思考することだと考える。(j1)

(56) 私たちが行うのは、(中略)ただ率直に自分自身にある相手国・多国籍の友人へのイメージや歴史につ

いて触れ、知ることである。こういったきっかけによって、私たちは他国に対して多くの視野を養うことができる。(j3)

(57) 中国の生徒も参加したことで、日本と韓国の協調だけではなく東アジア全体の協調についても考えることができた。お互いの国についてまずはよく知ること、そしてお互いの違いを受け入れることの大切さについて考えることができた。自分自身この授業を受けたことで韓国やアジア圏について前よりも深く考えるようになったし、得るものが多かった授業であったと感じる。(j6)

(58) 中国人と香港人は日本に対してどのようなイメージ持っているのかという部分を聞きながら本当に興味深かったが(後略)(k1)

(59) この経験で東アジアの問題について関心を持った世界市民にもう一步近づき、より積極的に、いい関係を保ちながら意見を発することができる人になれたのではないかと思う。国を越えてグローバル社会を生きている我々の絆が増々強くなっている今、お互いのありのままを向き合って理解しようとする勇氣は必ず必要に違いない。今こそお互いの絆を感じ、よりいい関係を築くために労力を注ぐべきだと思う。(k2)

(60) 中日韓の教育における異なる点を分析していくうちに、各国の教育はすごく異なっていることに気づき、皆さんにも納得できるような分析や提案を考え、いろいろと悩んだ最後発表時のようにまとめたが、それでも主観性が入りすぎたかどうか心配した。それは、自国の話になると、どうしても肩を入れたいという考えが存在しているからである。しかし、意見が異なった場合、意見交換と考え、率直に語り、同時に相手の率直なことばを聞くのもすごく勉強になれると思う。ただひたすらに自分の考えを他人にぶつかる、あるいは自分で考えないで、他人の意見だけを聞くのどちらでもなく、自分の考え方を相手に伝えると同時に、相手の意見を尊重するのが大事だと感じた。これは、東アジアの共生を探求するときにおいても重要ではないかなと思う。(c)

(61) 実際の授業では、シビアな話題について話し合うことに緊張と抵抗があったことは事実である。しかし、本音を交えながら対話を進めていくことによ

て、新たな発見や疑問点が見つかり、互いの緊張感もほぐれた。中身の濃い授業、自分自身の深い考察にもつながった。この問題解決へのプロセスは、ハードルの高いことに思われるかもしれない。しかし、このプロセスは、他人との関係づくりにおいて、最もシンプルな、そして大切な方法である。友達とけんかをしたときに、互いの嫌だなと思う部分を伝え合うことによって、仲直りへと前進することができる。見て見ぬふりをし続けると、見えない壁ができてしまい、裏で悪口を言い合うような関係へと悪化してしまう。現実の国家間・個人間のコンフリクトは、表面上の利益や過去の事実にとらわれすぎていて、この単純な方法が生かされていない。まず、コンフリクトの解決への第一歩がこの基本的なプロセスにあるということに気づき、実践していかなければならない。(j4)

(62) 同年代の韓国人と普段であつたら話さないような政治問題や歴史問題について話し合う機会が設けられたのは非常に貴重だと感じる。特に、日本と韓国はあまり仲の良くない、ともすれば敵対することもある国である。そのような国で生まれた人同士がグループを作りお互いが協調しあい未来をよくしていくために話し合うことに意義があるように思えた。自身の中にある偏見に気づくことができたり、地理的には近い国である韓国を心的にも近づけていきたいと強く感じたりするようになった。また、少人数の授業ということもあってかお茶大側の生徒も非常に仲が良く雰囲気の良い授業であった。私は普段あまり発言することが少なく、また意見を言うのも得意ではないが、この授業では自分の思いを素直に伝えることができたので良かった。全ての生徒に意見を言う機会が与えられていたため、よりフラットで居心地の良い授業になったのではないかと感じる。(j6)

(63) この授業は私にとっては人生の第一歩になった時間でもあった。上述したように、私は論争や敏感な問題に触れることが苦手で、できるだけそういうことを避けてきた。この授業に参加しようと思った時も自分がしっかりこういう弱みを克服できるのか心配をしていたが、授業は成功的に終わり、むしろお互いを理解しあえて、すっきりした達成感さえ感じている。(k2)

(64) 社会化する前の人間は国籍問わずみな同じなのだから、社会化で形成された固定観念が何なのか把握した上、他の文化の人と接する時、それを一時的に捨

てられたら、もしくは、意識した行動が出来るのならお互いをもっと理解しやすくなるのではないかと思った。(k2)

(65) 授業で皆さんの発表を聞き、再びコミュニケーションの大切さを感じた。j5さんとk2さんの発表では、お互いの立場を理解する努力が大切だとあったが、それはとてもすばらしい提案だと思い、まさにこの授業において私たちがやってきたことだとも思う。「相手のことが理解できない」と思い込んですべてを拒絶するのではなく、「どうして相手はこういう風に考えるのだろう」と自ら相手の立場に立ち、違う角度から相手の意見を考えれば、思考の差異も必ずしも理解できないではなくなるのであろう。高齢者や中年層は、外国との交流も今のように頻繁ではないし、考え方も若者より硬いので、実行するときは少し難しいかもしれないが、グローバル化が進んでいる現代社会において、可能性は以前より大きくなったのではないかなと思う。その上に、若者たちの努力も加われば、理解し合えるときはきっと来ると思う。(c)

(66) 社会人になり、この機会に学んだこと、気づいたことを実際に実践する人になってほしいと思う。グローバル時代に迎え、私たちは外国人と会う機会がだんだん多くなり、視野が広がるはずである。東アジアの未来のためにも、私たちの世代の役割が重要だと思う。つまりこの授業は、平和を迎える東アジアを作るための一歩になったという点でその意義があるだろう。(k3)

(67) この授業を通して日本に対する自分のアイデンティティーを考える等、色々なことを初めて経験して、自分が持っている日本に対するアイデンティティーを詳しく考察した。それだけではなく、多国人々が持っているアイデンティティー初めて聞くようになって、もっと知りたかった部分は質問の時間を通して、もっと詳しく分かるようになって良かったと思う。このようなことを通して、今までは経験することが出来なかった授業だと思う。(k1)

(68) 参加したり、情報を得られるような結果を広めたりすることが、授業を経験した人の役目ではないだろうか。これは、私にこれまで「できないよ」「無理だよ」というように言ってきた人に伝えることが、私の役割であるように思う。「できない・意味ない・知

らない」ではなく「できるかもしれない・意味があるかもしれない」という意識に変えていくことが、重要である。(k3)

Byram は間文化的シティズンシップ教育において外国語を学ぶことは、他者のアイデンティティの受容につながり、間文化的なアイデンティティの形成に寄与するとしているが、これについては、日本人全員（及び h）が「他者の言語や文化を学ぶ必要性」を述べている。これは留学生たちが日本語を学ぶ中で日本に対するイメージが大きく変化したのをインタビューなどを通して知ったためであろう（(69)～(73) 参照）。

(69) 他のアクターの視点に立つためには彼らのことをよく知る必要があり、その第一歩として外国語教育が有効だと考える。韓国の状況を知るには韓国語で書かれた記事と日本語で書かれたものの双方を読むことで、視点の違いや事実が歪曲されている部分を明確にできる。(j1)

(70) 韓国語の話せない私にとっては、外国語である日本語で表現している釜山大外や留学生のみなさんは、さぞ大変だろうと思ったが、授業が終わった後にパートナーである k1 さんに話を聞いてみると、「母国語じゃないからこそよりフランクな意見が言えたりするんですよ」と話されていて、なるほどと思った。（中略）また、彼女の言葉を聞いて、外国語教育の意義も考えさせられた。外国語を学ぶとその文化的背景も垣間見える。外国語を学ぶことはその国の価値観や考え方に自分の目線を合わせてみることでもあるのではないだろうか。まずは「異なる文化を持つ人の相手の立場になってみる」ことから対話は始まるのだと思う。闇雲に対話するのではなく相手の立場も考えること、それが外国語を学ぶ過程で自然と実施できるのかもしれない。(j2)

(71) いまだに周囲の人から、「韓国語を学んでも将来役立つかわからない」や「大学生が話し合い・対話をしただけでお互い分かり合えるなら、もうとっくに国の関係は良好になっている。何度も政府間で対話しているのだから」といわれることがある。確かに、今勉強している英語以外の言語を使用することはないかもしれない。また、私たちの一つの授業で社会や国を動かす力になることさえもわからない。しかし、言語を学び、現地の言葉であいさつをすれば、現地の人はそ

れが拙い発音だとしても優しく受け入れてくれる。言語を学ぶことが先ではなく、相手国の文化や歴史を知ることがきっかけとして、このクラスにも様々な経歴から日本語を学んだり、韓国語を学んだり、中国語を学んだりしている人が多かった。相手への偏見や好む点など人それぞれかもしれないが、そこから得る新しい相手への興味が生まれる。言語を知るといのは、将来に役に立つ・立たないという問題ではなく、相手を知るとい点での一歩であるという点での、言語教育の意味も知った。(j3)

(72) 日本では、高校生までは、英語に特化した授業を受けるため、他の言語を学ぶ機会はほぼ無いに等しい。一方、韓国や香港では、中学時代から、英語以外の外国語を学習できる機会が設けられている。また、韓国の大学入試の科目には日本語をはじめとする外国語も含まれている。内発的な動機によって外国語学習をはじめることが最も理想的ではあると考える。しかし、受動的・外発的に学び始めた外国語にいつしか面白みを感じ、国に対する興味・関心も湧いてくるというパターンもあるであろう。だからこそ、複数の外国語を学ぶ機会が増えていくべきであるという結論に至った。(j4)

(73) 私のグループの発表で、外国語教育の役割について考えた。多くの人は外国語の勉強で他の国へのイメージが変わった、そのきっかけで他の国を詳しく知ることができて、その国の人とも交流ができるようになる。実際私も日本語の勉強を通して、日本人と直接に交流ができて、日本人へのイメージや自己アイデンティティにも変わりがある。言葉はアイデンティティ、他者イメージ形成で大切な役割を果たしている。(h)

#### 総合的考察

まず RQ1 の ABC モデルの各段階での学びについては、「自己のアイデンティティ」や「他者イメージ」は決して先天的なものではなく、教育やメディアなどの影響で形成されるものであることに気づき、その意味で東アジアに存在する国家間の対立は、これら外的要因により個々人の内面に作り上げられたアイデンティティや他者イメージに起因すると考えることもでき、それらを改善することにより対立は克服できる可能性に気づいている。

続いてRQ2の東アジア共生のためのシティズンシップ教育としての成果については、ほとんどの学生が本授業に成果を見出していた。本授業ではこれまでも東アジアの政治・歴史問題を扱ってきたが、それをABCモデルを用い、内面の問題として扱った本授業は、授業を担当した筆者自身も今までにない手応えを感じており、東アジアがともに生きるためのシティズンシップ教育としての有効性が示されたと考えている。紙幅の都合で紹介できなかったが、テレビ会議システムの運用面など、テクニカルな面で問題点も指摘されているため、これらを改善しつつ、より有効な教育に発展させていければ幸いである。

#### 参考文献

- Byram, M. (2008). *From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Byram, M., Golubeva, I., Hui, H. and Wagner, M. (eds.) (2016). *From Principles to Practice in Education for Intercultural Citizenship*. Multilingual Matters.
- Lundgren, U. & teacher students (2016) *Intercultural Encounters in Teacher Education ? Collaboration Towards Intercultural Citizenship*. Byram, M., Golubeva, I., Hui, H. and Wagner, M. (eds.) (2016). *From Principles to Practice in Education for Intercultural Citizenship*. Multilingual Matters.
- Schmidt, P. R., & Finkbeiner, C. (eds.). (2006). *ABC's of cultural understanding and communication: National and international adaptations*. IAP.
- 小林智香子 (2013) 「TV 会議システムを用いた日韓国際遠隔授業に対する評価—文化を取り入れた総合的日本語教育のために」『比較文化研究』108, 43-54.
- 小林智香子 (2013) 「TV 会議システムを用いた総合的日本語教育による日韓国際遠隔授業における学び」『比較文化研究』110, 93-103.
- 西岡麻衣子 (2010) 「多文化交流学習の理論的枠組みに関する研究：オルポートの「接触仮説」に基づいて」同徳女子大学校大学院修士論文。
- 松野志歩 (2014) 「日韓交流セミナーにおいて日本側学生は何を学んだか」お茶の水女子大学大学院修士論文。
- 森山新 (2016) 「シティズンシップ教育としての複言語・複文化教育 (第15章)」『第二言語としての日本語習得研究の展望：第二言語から多言語へ』, 413-443, ココ出版。
- 森山新 (2019) 「日韓の共生をめざす日韓大学生国際交流セミナーと教師の役割」『人文科学研究』15, 121-134.
- 森山新 (2020) 「間文化的シティズンシップ教育としての日本語教育：第10回日韓大学生国際交流セミナーでの韓国側学生の変容より」『人文科学研究』16, 67-79.

2020年2月27日 受稿